

アンビエントに着目し、公共空間の「心地の質」を追求



深澤 直人

プロダクトデザイナー

山梨県出身。2003年に「NAOTO FUKASAWA DESIGN」を設立。卓越した造形美とシンプルに徹したデザインで、イタリア、フランス、ドイツ、スイス、北欧、アジアなど世界を代表するブランドのデザインや、日本国内の企業のデザインやコンサルティングを多数手がける。

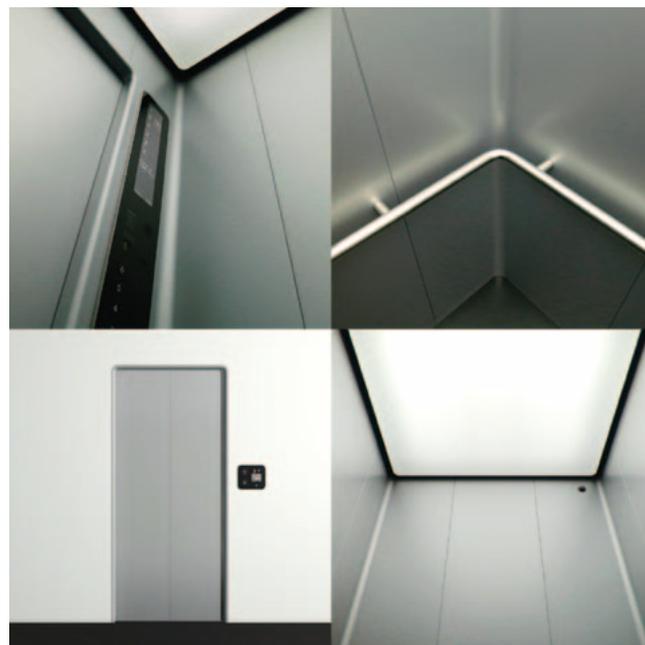
電子精密機器から家電・インテリアに至るまで手がけるデザインの領域は幅広く、多岐に渡る。米国IDEA金賞、ドイツiF design award金賞、日本グッドデザイン賞金賞、英国D&AD金賞、ドイツred dot design award、毎日デザイン賞など世界中で受賞歴多数。

長年、プロダクトデザイナーとして、個人が所有するモノのデザインを数多く手がけてきましたが、現在の私の興味は、多くの人が共有する公共空間へと向かいつつあります。その理由は、現状の公共空間が、バリアフリーやユーザビリティには配慮されているものの、デザイン面からみれば比較的、無頓着に扱われてきたことにあります。

中でもエレベーターは無意識に利用されている公共空間の典型的な移動体であり、高層化が進む都市に不可欠な重要インフラでありながら、そのデザイン性が深く追求されてきたとはいえません。そうした人間の身の周りにおいて、人間が無意識のうちに関係性を築き、当たり前のように利用している公共空間の「心地の質」を向上させることで、「人間生活の真の豊かさに貢献したい」、「人をやさしく包み込み、心地よさを感じさせる空間をつくりたい」、という強い思いがありました。

現在、日立は昇降機の製品やサービス全般を対象に、「HUMAN FRIENDLY」というコンセプトを掲げています。このコンセプトを具現化した第一弾が、2015年に発表したエレベーターのコンセプトモデル「HF-1」です。私は、このコンセプトの策定からHF-1のデザイン・監修に至るまで、日立の事業部やデザイナーの皆さんとともに携わる機会を得ました。

今回、HUMAN FRIENDLYを実現するために意識したキーワードが、「アンビエント (ambient)」です。アンビエントとは、身体を取り囲む周囲のこと。その空間に醸し出される空気感や雰囲気指します。人はエレベーターに乗ると



エレベーターコンセプトモデル「HF-1」

き、特に意識することなく目や耳、肌で空気や光、音を感じ、乗り合わせた人との距離を取ったり、視線を上げたり、壁にもたれかかったり、ときには降りる人のためにドアを押さえたり、といった行為をします。すなわち人間はエレベーターからさまざまな感覚を引き出され、無意識のうちに行動を起しているのです。その際の人の行動に寄り添うことで、この空間からできる限り「ささくれだった」ものを取り除こうと考えました。

こうして生まれたデザインが、角のないフォルムです。人間の身体に角がないように、カゴの入隅や表示パネルなど、すべてのディテールから角をなくしました。さらに、時間帯によって変更可能な光源や、自分が乗っているカゴの位置を確認できるグラフィック表示などを提案し、その結果として、実に滑らかで破綻のない美しい空間が実現できました。公共空間デザインの一つの指標を示すことができたのではないかと自負しています。

私はこれまで世界のさまざまな都市を見てきましたが、日本ほどディテールにこだわる上質な空間づくりに長けている所はほかにないと感じています。HF-1もまさに日本のデザインの良さが凝縮したプロダクトだといえます。都市や公共、交通などさまざまな分野で社会インフラ事業を手がける日立は、まさにその上質な空間づくりの担い手であり、新しい公共空間の指針を自ら示していくべきだと思います。その第一歩がこのエレベーターであり、HUMAN FRIENDLYのコンセプトが世の中に広がって、次代の豊かな都市づくりに活かされていくことに期待しています。